

1176

¥300

定価●1200円

北国に駆ける愛

逆境を越え、真実に生きる夫婦の姿 三橋萬利・幸子

いのちのこば社

逆境を越え、真実に生きる夫婦の姿

北国に駆ける愛

三橋萬利・幸子

ISBN4-264-00750-X C0016 ¥1200E

三橋萬利(みつはし・かずとし)

札幌キリスト福音館牧師。

1928年(昭和3年)青森県に生まれる。小児麻痺のために両足と右手の機能を失う。小学校に入学できず、まったくの独学で文部省大学入学資格検定の一部の学科に合格。21歳で入信し、その喜びを人々に伝えるため、結婚後、軽井沢聖書学院にて学びと訓練を受ける。現在は札幌で200名近い信徒の牧会をしながら国内、国外で幅広い伝道活動と講演活動が続けている。2人の子息もクリスチャンで、長男夫婦は現在、ハワイ・インターナショナル日本人教会の宣教師として活躍中。

三橋幸子(みつはし・ゆきこ)

三橋萬利牧師夫人。

青森県に生まれる。高校3年生の時、主イエス・キリストと出会う。19歳の時、両親から勘当されながらも萬利師と結婚。以来30年、一級身体障害者の夫を背負い、文字通り夫の手足となって国内はもちろんのこと、国外まで、いつも一緒に出かけている。聖書学院在学中は生徒、妻、母として多くの経験をし、また、伝道牧会の厳しい中で2人の子を育てた。現在はご主人と共に「婦人セミナー」などで、みずからの体験を語る機会を多く与えられている。

『出用伝道映画

『北国に駆ける愛』

本ミッション映画部

〒534 大阪市都島区御幸町2-2-9 ☎06(923)2212

序 文

三 浦 綾 子

三橋先生ご夫妻に、初めてお会いした時の感動を、私は随筆集『孤独のとなり』に納めてある。その文を少しく抄出してみたい。△司会者の挨拶があり、いよいよ講演がはじまることになった。すると、一人の女性が、前方の椅子に坐っていた三橋先生のそばに、しとやかに近づいて行った。三十半ばに見えたその女性は、先生のそばまで行くと、先生に背を向けて屈みこんだ。先生はその女性の肩に両手をかけて、おぶさった。彼女は静かに立ち上がり、一歩一歩踏みしめるようにして、壇上の椅子に近づき、先生をその椅子に移した。その控え目な、しかしひたすらな表情が、私の心を打ち、私はその二人の姿に感動した。▽

この時の感動は、今も変らない。つまり、先生ご夫妻のあり方は、この時私がお見受けしたままの生き方なのだ。小児麻痺で体の不自由な先生、夫人に背負われねば壇上に上ることのできない先生、しかしその体の不自由を、決して卑下もしなければ、かこもしない先生。夫人もまた、夫の体の不自由をいささかも恥ずることがない。このご夫妻は全く対等な立場でお互

いを尊敬し、愛し合っておられる。

それは、共に主にある一人の人間としての、神の前にある生き方から生れてくる姿勢なのだ。だからこそ先生は、大きな明晰な声で、明るい笑顔で講演し、夫人もまた、会う人の心を深く打たずにはおかない輝く顔をなさっておられるのだろう。

このお二人が、この度証し集を出されるという。これこそ正に、私たちの希望の書ではないだろうか。私はこの書を、体の不自由な人にも、長く病んでいる人にも、悲しんでいる人にも、苦しんでいる人にも読んで欲しいと思う。いや、それにもまして、健康な人、すべてに満足している人、何一つ痛むことのない人に、じっくりと読んでいただきたいと願う。私たちはここに大いなる幸の書を手にしようとしているのである。

もくじ

〈序 文〉 三浦綾子

第一章 生い立ち、出会い、結婚へ—— 7

〈三橋萬利〉 生い立ち 8

喜びのおとずれ 29

神が与えて下さった花嫁 41

〈三橋幸子〉 真実を求めて 57

結婚に導かれて 71

第二章 訓練と開拓、ビジョンに向かって—— 81

〈三橋萬利〉 聖書学院で学ぶ 82

主にゆだねて函館へ 91

札幌キリスト福音館 102

〈三橋幸子〉 従順を学ぶ 112

第一章 生い立ち、出会い、結婚へ



ウツギ

カット
竹本克己

あとがき

第三章 妻として、母として 143

△三橋幸子▽ わが子へのビジョン 144

与志哉 153

母と子 159

しつけの基本 162

父親像 167

障害者の主人 170

主人を主人として 177

妻として 182

初めての開拓伝道 128
札幌へ 134

誕生い立ち

三橋 萬利

二人の母

昭和六年（一九三一年）二月二日。青森市の一鉄道員の家で、二十八歳の若い母親が、今まさに死に直面していました。



「子供を一目見せて下さい。」

小児麻痺に冒され、両手両足をただぶらぶらさせているだけの三歳になったわが子を見、「よろしく頼みます」と涙ながらに言い残して死んでいったといいます。この人が私の生みの母です。

故郷の青森市で行われた母の五十年忌の席上で、おばから初めて聞かされた母の死の様子でした。母についての思い出は何ひとつなく、ただ写真を通して顔を知って

いるだけという私にとって、このおばの証言は大きな感動となって胸の中に響きました。「やはり母親だなあ。」死を目前にしてわが子の行く末を案じてくれた母の心情を知らされて、熱いものが込み上げてくるとともに、亡き生みの母への思慕の情を深くさせられたのでした。

子供の頃も、また青年期も、これというほどの楽しい思い出もなく過ごした私ですが、後妻に來た二度目の母に背負われて経験した幾つかのことは、今も懐かしく脳裏に浮かんできます。ことに津軽名物のねぶた祭りを母の背で見物した時のあの光景を決して忘れることはできません。「ラッセラー、ラッセラー」のかけ声と勇壮な太鼓と笛の音に合わせて、力いっぱい手足を動かして踊り跳ね回る踊り子たちの姿は、手足のなえた私にとってまったくうらやましい別世界の姿でした。「この子にも見せてやってくださいませんか。ちょっとお願いします」と、人垣をかき分けながら前の方に出て行ってこのねぶた祭りの行列を見せてくれたのが育ての母でした。

二度目の母は、生みの母が亡くなって間もなく、親戚の家から十六歳の若さで父のところの後妻として嫁いできました。体の不自由な子供を残された父にとって、ピンチ・ヒッターのようなお嫁さんだったのではないでしょううか。小柄で心臓があまり丈夫でない人でした。いつもゼーゼー言いながら私を背負って買物に出かけたり家の仕事をしている母を、子供心にも痛々しく感じていたものです。

「外に出て遊びたいだろう」と近所の子供たちと一緒に私を背負ってかくれんぼや石けりなどをしてくれた母。私が一人ポツンと寂しそうにしていると、物差しやハタキでチャンバラごっこをして遊んでくれた母。「大きくなってからでは重くてたいへんになるから今のうちに」と、青森港の岸壁に立っては青函連絡船を見送ってくれましたし、デパートのおもちゃ売り場では夢の世界を味わせてくれました。

生みの母と育ての母。私はこの二人の母の大きな大きな愛の下に生まれ育てられたことを誇りに思っています。そしてこの二人の母を通して人としての大切なもの、人の心と心の触れ合いの素晴らしさ、親と子の深い絆きずなのうるわしさを教えてもらったと思っています。この母たちに決して恥をかかせるような子供であってはならない、人に後ろ指をさされるような生き方ではないけない、これが父母を敬う子供の姿であると信じて今日まで来ました。

障害との戦い

身体障害者である私が自分というものを意識するようになったのは五歳くらいの頃だったでしょう。積み重ねた掛け布団にもたれて座っている自分の姿をぼんやりと記憶しています。私の両足はまったく機能を失い、歩くのはもちろんのこと、立つことすらもできませんし

た。右手は全然動かず、左手が少々きくだけです。それでもある時から、いざって家の中を動く練習を始めました。

最初はなかなかうまくいきませんでした。布団から離れていざ動こうとすると、バランスを失ってひっくり返ってしまうのです。それでも何度も何度も繰り返し挑戦しているうちにひっくり返らなくなってきました。しかも少しずつですが畳の上を移動できるようになったのです。横幅わずか九十センチそこそこの畳ですが、私にとって、それはそれは難事業でした。最初は一枚の畳を横切るのに五分もかかったでしょうか。それでも一枚を渡り終えた時の喜びは天にも昇る心地でした。

こんな状態ですから小学校への入学どころではありません。自分と同じ年頃の子供たちがランドセルを背負ってうれしそうに学校へ行く姿を見ては、一人取り残されたというたまらないほどの寂しさと悲しさを覚え、「ぼくも学校へ行くよー」と母の背中で泣き叫んだものです。その頃から、自分は他の子供たちとは違うんだと自覚し始めるようになりました。

みんなと同じように学校に行きたい。ランドセルも背負いたい。鉛筆も筆入れも欲しい。そんな私の気持ちを察してか、父がノートと筆入れ、消しゴム、鉛筆などを買ってくれました。教科書は二歳年上の姉のお古をもらうことになり、これでなんとか小学校入学の気分を少しでも味わうことになったのです。

先生はもっぱら辞典類です。百科事典、国語辞典、小学生の学年別の大全科などが私にとって恩師なのです。今日のように学習塾に通ったわけでもなく、家庭教師を頼んだのでもありません。母や姉の協力はあったものの、まったくの独学でした。できるだけ時間を決めて机に向かつては教室気分を一人で味わったものです。

平仮名や片仮名は「いろはガルト」で遊びながらなんとなく覚ええました。学習にはそれなりの気構えが必要です。たとえば、一日に一つの漢字を覚えることができたなら、一年で三百六十五の漢字を覚えることになります。これだけの漢字を知っているのと知らないのではどんなに大きな違いがあることでしょうか。ですから私は、新聞を開いてはその日覚えるべき漢字を一字見つけ、外に出た時には看板の文字を見つける、という具合に覚えていきました。今でもその習慣が身についていて助かっています。

縁側での復讐劇

家の教室で勉強しているとはいえ、子供はやはり子供です。外の方でにぎやかに楽しそうに遊んでいる子供たちの声が聞こえてくると、もうじつとしてはいられません。母にせがんで背負ってもらっては外に出て子供たちの遊んでいる姿を見たり、仲間に加えてもらったりしたものです。

のです。

時には子供たちをわが家に迎え入れて一緒に遊ぶこともありましたが、さんざん家の中で暴れ回り遊び散らしたあげく、そろそろ外に出ていきたくなるとだれかが言うのです。

「おい、こんな家の中で遊んでもつまんないから外に出て遊ぼうよ。」

この一言に、「そうだ、そうだ」と簡単に相談がまとまり、皆いっせいに外に飛び出していくのです。それだけならまだあきらめもつくのですが、出ていく時の一言が私の心を痛めるものでした。

「こいつは外に出られんもんなあ。」

今まで一緒になってワイワイガヤガヤやっていた仲間たちが急になくなった寂しさと、「外には出られない」とばかりにされた悔しさにポロポロと涙をこぼしながら散らばった遊び道具を片づけたものでした。こんな時、母はいつも私を慰め励ましてくれました。でも心の中はすっきりしません。子供心になんとかしてばかにした子に復讐してやりたいという執念のようなものが燃えてくるのでした。

私の家には表通りに面した縁側があり、その縁側の戸を開けて外の様子を眺めるのが私の日課でした。決まった時間に夕食のための買い物に出かける近所のおばさんたちの様子、家族そろって出歩く人たちの家族構成、曜日によって小学生たちの下校時間が変わることなど、私

に社会見聞の場を提供してくれたのがこの縁側でした。また、子供たちとの触れ合いの場でもあり、私がこの縁側から顔を出しているとみんなが寄り集まってきました。

ある日、私をばかにした子供が以前のことなどけろっと忘れてこの縁側にやって来て、「遊ばないか」と言いました。

退屈していますから遊びたいのはやまやまですが、このまま家の中に入れてやるのはどうも悔しい気がします。どうしてもあの時の仕返しをしてからでないと気持ちが収まらないのです。そんなことを考えているとは知らずそばに寄ってきたその子の手首を、チャンスとばかり、私に残された唯一の左手の機能を精一杯働かせてぎゅっと握りしめたのです。相手の子はびっくりしました。逃げようと一生懸命になるのですが、こちらもあの時の恨みをこの時とばかりにますます強く握りしめてやるのです。

「この間はおれを外に出られないと言っただけにしたらどうだろう。」

とうとうその子は泣き出してしまいました。頃合を見て手を離し、縁側の戸をぴしゃっと閉めました。スカッとした気分だったのは言うまでもありません。

私は自分があのようにされた時、どんなに悔しかったかをこの子にも経験させてやりたかったのです。痛い目に合わせられた上に戸まで閉められたらさぞ悔しいことだろう、「ついにやったー」自分なりに勝利感に満たされました。

ところが相手もこんなことをされることがわかると、次からはなかなかそばに寄ってきてくれなくなりました。手の届かない所に立ったままで「遊ばないか」とお伺いを立ててくるのです。これには困りました。やはりこのままでは残念です。そこで浮かんできたのが飛び道具です。口の中にツバをいっばいたため、舌を丸めておいて相手のちよつとしたすきを見てその顔に向けてプーッと勢いよく飛ばしてやるのです。

「わあ、汚い。」

びっくりしている相手に向かって、「お前はおれをばかにしただろう」と言い残して縁側の戸をぴしゃっと閉めました。

今思うと、他の者から取り残され疎外されているという敗北感に対するうっぶんをこんな形で晴らしていたのでしょうか。

こんな私にとって、成長して大人になっていくことは、ますます苦しみと惨めさが大きくなっていくことでした。そのことをさらに深刻にしたのが、あの戦争への突入です。

戦争の最中で

当時の日本では、兵隊になれないような男は男でないという雰囲気がありました。私の家の

前を毎日のように、「勝ってくるぞと勇ましく」の軍歌とともに、出征していく若者を送る行列が通っていきました。その行列を縁側から見、軍歌を聞くことに、男として生まれながら男らしく生きられない自分に対し、絶えず心の葛藤があったものです。

夜寝る前にたらいに湯をくんで足を洗ってくれる父の何気ないことばも私にはたいへんきついものに聞こえました。やせ細って曲がってしまったわが子の足を洗いながら毎晩のようこう言うのです。

「どうしてお前の手足はこうなってしまったんだろうなあ。よその子供なら、お前くらいの年頃になれば一人前に父親の手助けになるのに、お前は何の役にも立たんもんなあ。」

父は小学生の頃から貧しい家庭の手助けをし、小学校四年の時には馬の手綱を引いて野良仕事の手伝いをしていたのだそうです。それだけに、長男として生まれた私に対する父の期待は大きかったのでしょう。でも、父のこのようなことばが、私自身の「自分は何も役に立たない者」という思いを強くさせたのも確かなことでした。

当時どこの家庭も物に乏しく、たいへん厳しい耐乏生活をしていました。当然のことながら、わが家もこの波を被らないわけがありません。そんな中で私は、役に立たない自分なのだから遠慮しなくてはいけないと心に決め、食事の量を減らすことにしました。家の食糧事情に少しでも役立つのではないかと考えたからです。畳の上をいざって動けば畳も痛むしズボンも

すり切れるから、できるだけ動かないようにしました。自分なりに気を遣って少しでも役に立つ者でありたいと願っていたのです。

人間にとって自分の存在になんの価値も意義も見出せないことほど悲しくつらいことはありません。この悲しさと同様さは、私が主イエス・キリストに出会う時まで続きました。

こんな私が、さらに大きなショックを受ける出来事に直面しなければなりませんでした。

当時、日本の敗戦の色が濃くなり、アメリカ空軍による各地への空襲も頻繁になってきました。私の住む青森市もいつ大規模な空襲の標的になるかわからない状況です。すでに何回か、空母から発進した艦載機による小規模な空襲がありました。どうしても人の足手まといになる私ですから、前もって避難している方がよいだろうと、家から四キロほど離れた生母の実家に移ることになったのです。夜になると母が私の世話をしに来てくれました。

昭和二十年（一九四五年）七月二十八日の夜。ほとんどの者が寝静まった真夜中、突然警戒警報が発せられ、停電とともに空襲警報のサイレンが真つ暗闇の中に鳴り渡りました。家人たちははれ先に戸外に飛び出していきます。だれも母と私を気遣ってくれませんでした。このままでは取り残されてしまいます。

小柄な母は、当時十七歳になっていた私を背負って、「ウーウー」とサイレンの鳴りやまぬ闇夜の中を外へ走り出したのです。すでに青森市方向の空は真つ赤に燃えていました。「父は

どうしているだろうか。姉はどうなっただろうか。」市内に残った家族のことが気にかかりましたが、母はゼイゼイ息を切らせながらも村里離れた遠くへ行こうと必死に走り続けました。

その母の背で私は、自分と同じ年頃の若者たちは、ある者はすでに少年飛行兵として戦場で、ある者は徴用工として職場で活躍しているのに、なんと自分は情けない者だろうと、空襲の恐ろしさよりも自らの惨めさに浸らされたのでした。

突然、母の「あっ」という声によって現実に戻されました。気がつくとも穴の中に落ちてしまっていたのです。母はなんとかして穴からはい上ろうとするのですが、私を背負ったの女の身ではとうてい無理でした。そこで、私を背中から降ろして母がまず一人で穴の外に出ました。それから腕を伸ばして私の手を握り精一杯の力で私を引き上げようとするのですが、腕にも腰にも人並の力がない私にとって、ただ母の手を握ってぶら下がるのが関の山です。何度試みても結果は同じです。ただお互いが精力を尽くして疲れるだけです。

やがて、近くにも焼夷弾しょういだんが落ちたのでしよう、だんだんきな臭い煙が私たちの周りを覆ってきました。私は母に言いました。

「もういいから逃げてくれ。」

「ばかなことを……。一人だけで逃げていかれるものですか。死ぬなら一緒だよ。」

……生みの母が亡くなってから十四年の間、実の子のように心を込めて育ててくれた母のことには愛の力がこもっていました。あの時の母のことを私は一生忘れることができないでしょう。

そうこうしているうちに、幸運にも男の人が通りかかり、やっと穴から引き出してくれました。

この空襲によって青森市の九〇パーセントが焼失しましたが、幸い私の家は難を免れて残りました。その後一か月も経たないうちに戦争は終結しました。

父母の相次ぐ死

父はあまり病気をしない元気な人でした。体の不自由な子供を抱えている一家にとっての唯一の働き手としての自覚からでしょうか、割合に健康管理には気を配っていました。日頃から、「おれが死んだらお前たちはどうやって生きていくんだ。おれは百二十五歳まで死なんぞ」と口癖のように言っていたものです。

その父がある日の夕方、(その日は徹夜勤務のはずなのに)突然家に戻ってきて「どうも手の指先がざらざらして変だ」と言うのです。次の日、病院に行って調べてもらったところ、「どこ

かの血管が詰まっている」ということです。はつきりとした原因もわからないままに父の病状はどんどん進み、体がだんだん動かなくなっていきました。

父の病気が治るものならどんなことでもという母の切なる願いから、当時はやみ値で一本三千円もするペニシリンを三本も打ちました。一サラリーマンの家庭にとって、これは非常に高価なものでしたが、この薬もなんの効き目も表してくれません。

「溺れる者はわらをもつかむ」のことわざ通り、親戚の者たちが祈祷師の所へ行ってお告げまで受けてくる始末でした。「キツネがついているから神棚に供え物をしてキツネを追い出さなければならぬ」ということになり、供え物をしてから、「キツネが出ていく」というので私が日頃外を眺めているあの縁側の戸を少し開けておくことになったのです。本当にキツネは出ていくのだろうか、出ていくとすればどんな姿をしているのだろうかなどと、非常に興味を持って見ていたのですが、もちろん何も起こりませんでした。

このような中で、父は症状が現れてからわずか十二日目に、病名もあまりはつきりしないままこの世を去っていったのです。常日頃口癖のように言っていたあの百二十五歳にははるかに及ばない四十七歳でした。大黒柱を失った私たち一家の悲しみと動転はことばで言い表すことができないほどのものでした。

父を失った母のショックは大きく、せめて父の戒名に院戒名を付けてあげたいと言いつつ

した。院戒名をつけてもらうには高いお金が必要です。ペニシリン代などで多額の出費をした後でしたが、母のたつての願いで「清光院義峰賢道居士」という戒名をつけてもらいました。まだクリスチャンになっていなかった私ですが、「お金で死後の位を頂く」などということが信仰の世界にあつてよいのだろうかと非常に疑問に思ったものです。

父が死んでから八か月くらい過ぎ、まだ心の平静を取り戻してもない昭和二十三年（一九四八年）七月二十九日の午後のことです。私は自分の部屋にいたのですが、何か異常な気配を感じて母のいる部屋まで行ってみてびっくりしました。目の前の母は、呼んでも何も答えず、ただ苦しみの中でもだえているだけです。

この日は朝から心臓の調子がよくないと言っていたのです。私は無我夢中で母の名を呼び続け、体を揺すり続けました。しかし一言のことばも出すことなく、やがてそのもだえもやみ、母の体は動かなくなりました。病名は心臓弁膜症、三十五歳の若さでした。

近所の方々や親戚の者たちも急を聞いて集まってきてくれました。私は冷たくなってしまった母のそばで、周りに人がいることなどは一切かまわずにただ泣けて泣けてどうしようもありませんでした。あんなに世話になった母に対して一言の感謝のことばを言う間もないままの別離は、父の死以上にあまりにも悲しく過酷に思えたのです。

通夜の晩、泊まり込んでいた親戚の者たちが眠った後、一人祭壇の前に座って一夜を明かし

ました。幼い時からの母との数々のことが思い出されてくるのです。

「この子に見せてやって下さい」と人垣をかき分けながらねぶた祭りを見物させてくれた時のこと。サーカス小屋の前で客を招き入れている道化役者を私がせがむままに長い間立ちっぱなしで見せてくれたこと。父が徹夜勤務で留守の晩、チャルメラの中華そば屋さんが来るのを待って姉と三人で一つのどんぶりから分け合って食べた時のこと。そんなことがたまらないほど懐かしく思えるのです。

このように過ぎ去った日のことを思い巡らしてみると、ただ一方的に母に面倒のかけっぱなしであって、自分からは母に何もしてやれなかったという悔しさにも似た暗い気持ちに落ち込んでいくのです。それでも、この気持ちを慰めてくれることがたつた一つありました。それはただの一回だけでしたが、自分でお金を出して心臓の弱い母に薬を買ってあげることができたということです。

生母の実家はりんご畑を少し持っていて、そのりんごの実の虫よけのための袋張りの仕事を私にさせてくれたことがありました。私の小遣いの足しにでもなればという、実家の親心から出た仕事でした。新聞紙を足で押さえながら袋の大きさに裁断し、それを十枚ほど重ね並べのりづけするのです。私にとっては一枚の袋を仕上げるのにもたいへんな努力と根気が必要でした。報酬は十枚で一銭という約束でしたが、人からお金を頂くのはなんと苦勞のいることだ

ろうとつくづく思ったものです。

一冬かかって五千枚張ることができました。自分の手足を使って生まれて初めて頂いた五円報酬がなんと尊く感じられたことでしょう。それと同時に、自分に残されたわずかの機能であっても、それを用いて一つのことをなし終えたという満足感と喜びが与えられました。このお金を何に使うか。あれも買いたいし、これも欲しいしと、私の心は躍るようにして夢をふくらませるのです。

その時、一冊の雑誌の広告が私の目に強く入ってきました。それは「心臓病によく効く薬」という見出しだったのです。宣伝の文を読んでもなんとなく母によさそうに思えます。しかも一か月分で三円というのです。そうだ、この薬を母に買ってやろう。決心はすぐにつきました。

やがてこの薬が届いて母の手に渡った時の母の驚きと喜びよときたら並たいいのものではありませんでした。家を訪れてくる人ごとにこの薬のことを話して聞かせるのです。こんな小さなことでしたが、母に対して私なりの親孝行ができたことは本当にうれしいことでした。あの通夜の晩もそうでしたし、あれから四十年近く経った今日でも、たった一度しかできなかったけれどもあの薬のことが私の心を少しでも慰めてくれるのです。

悶々とした青春期

戦争中は「勝ってくるぞと勇ましく」の軍歌の中で身の縮まる思いをして過ごし、戦後は戦後で、生きるとは、という大きな課題を抱えての青年期でした。ことに両親の死後、姉夫婦に養われながら生きていく自分の人生を考える時に、その前途はまったく悲観的にしか見えませんでした。

三度の食事は食べさせてもらえるだろう。でも、人間は食べることさえできればそれでよいのだろうか、何もしないで食べさせてもらってそれでよいのか、当然結婚などは考えられない、こうして一人で寂しく暮らしていく人生。いったい人生とは何なのだろうか……。生きることに対する不安と疑問が次々とわいてくるのでした。

夜が更けて外には人通りもなくなった頃、縁側の戸を開けては夜空をよく眺めたものです。星の輝いている夜などは、宇宙の広大さと人間のちっぽけさをしみじみと感じさせられたものです。そのちっぽけな中で惨めに生きている自分が哀れに思えて、泣けてくることもたびたびありました。無性に亡くなった父を懐かしく思い、母を慕わしく思い、また人を恋しく思うのです。このように夜空は私を感傷的な世界に引き込んでいくのでした。

私のところには子供の時と同じように相変わらず友達の出入りが多く、同じ年頃の男女の若者たちが集まってきてレコードを聴き、トランプに興じ、あるいは将棋を指してそれぞれが暇つぶしをしていました。一日中いる者もあれば、途中から来る者、帰る者もあり、私の部屋はまるで「たまり場」みたいなものでした。いつ来ても留守にしていることなどない私ですから、彼らは自分の都合のよい時にやって来るのです。彼らにとってはいつでも開店している無料のレジャーセンターのようなものだったのでしょうか。私としても友達がだれも来てくれなかったらどんなに寂しい思いをしたことでしょうか。今でもこの時の仲間たちに感謝し慕わしくさえ思っています。

レコードを聴くといっても、ほとんどがだれかが買って持ってくる流行歌です。その内容といったら、人生の悲哀を歌ったものや男女の情をかき立てるようなものばかりでした。みんなと一緒にやってこのような流行歌を聴いてみても歌ってみても、かえって自分の人生に対する悲哀が増し、また青春期にある自らの異性に対する思いが乱されるばかりだったのです。

さらにこれに追い討ちをかけるのが、彼らが楽しそうに語り合っている会話の中身でした。私には身障者の友人がほとんどなく、出入りしている者たちは五体満足なだけに、話の内容も将来の希望にかかわることや結婚に関する若者らしい夢だったのです。私にはとても入っていないような会話ではありません。結婚に関する話などはまったく無縁なことしか思えず、そ

の場から消えてしまいたいような気持ちにかられるのでした。

せめて集まっている者たちの仲間に自分も入りたくてタバコを吸ってはみても、とても苦く口の中が焼けるようで、こんなものは二度と口にするものではないとすぐにやめてしまいました。それでは今度は酒に挑戦してみようと、ある日友人に酒を買ってきてもらって幾人かで酒盛りをしました。生まれて初めて猪口ちやくなるものを手にしたのですが、これもまた二、三杯飲んでいいるうちに気分が悪くなって吐き出してしまおうという始末でした。私の体はこのようなものを受けつけないようです。

こんなことではいけないと自らを励ましてみるものの、自分の力では一步も外に出られず両手も使えないような者にいったい何ができるでしょう。気持ちはただ焦るばかりでした。

そんな頃、わずかでしたが父の保険金が入ってきました。このお金を利用して始めたのが子供相手の貸本屋です。貸本屋といっても、例の縁側に百冊程度の本を並べているだけのものです。一冊五円ほどで東京から仕入れた本を一日五円で貸し出すのです。結構繁盛しましたが、なにしろお客といっても近所の子供に限られるのですから、たかが知れています。しばらくの間やってみて、結局やめることにしました。

さて本の処分をどうしようかと考えていると、知人の中に道端で店を出しておもちゃを売っている人がいるのを思い出し、彼に相談しました。その結果、家の近くにある神社の祭りの時

に彼がおもちゃの店を出し、私がそこで一緒に本を売らせてもらうことになりました。

いよいよ当日です。彼の店の隣で、家から運んできた四個のりんご箱の上に本を並べました。生まれて初めて道端に座って商売をするという興奮と恥ずかしさはたいへんなものです。一冊五円ほどで仕入れた本を十円で売りました。隣のおもちゃが何も売れないのに私の本はどんどん売れ、彼には本当に気の毒でしたが、おかげでたいへんなもうけになりました。

調子に乗った私は次に電気による治療院を始めたいというまったく大胆なことを考え出しました。思いつくとすぐにやり出す性分です。いろいろなカタログを寄せ集めてその中から一つを選び、治療師になる勉強をするための通信講座と電気治療器を東京に注文したのです。届くのが待ち遠しい毎日でしたが、いざ届いて通信講座の内容を読み、またその機械を実際に触ってみてがっかりしました。なんとという不注意と大失敗だったことでしょう。ご存じのように電気にはプラスとマイナスがあります。この電気治療器を操作するにはどうしても両手を使わなければなりません。左手しかきかない私にとっては、どんなに考えても無理なことがわかりました。

大金を使って大損をした後は、その埋め合わせをするために大もうけをしなければなりません。またまた大それた考えをもって始めたのが今度は「おでん屋」です。屋台はまたもやあの縁側です。用意したものは七輪となべ、それにこんにやくと、それを通す串。青森地方で、お

でん」といえば、こんにやくを串に通してそれをしょう油で煮るだけの簡単なものです。

その辺でぶらぶらしている子供を助手にしておでんを作るのですが、味は保証の限りではありません。こんなおでんを売ったところで売れるはずはないのです。ですから子供たちに買気を起こさせるのに何か工夫が必要です。そこで、一枚の板にたくさん釘を打ちつけ、それらを傾斜させて置き、上からラムネ玉を転がして「一」に入ったらおでんが五本、「二」に入ったら三本、「三」に入ったら一本、その他は何もなしという具合にゲーム風にしました。

これが当たり、子供たちの間では大評判になりました。近くの子はもちろんのこと、遠くからもやって来るのです。一回一回で五本のおでんをもらって大喜びの者もいれば、何ももらえずにがつかりしている子供もいました。あんまり「一」にばかり入れられてはこちらの方がまいってしまいます。そこでだれも来ないような時に、「二」のところの釘を曲げてそこに入らないよう工作したこともありました。

このようなことで小遣いにはあまり不自由もなく、その上ラジオの組立てや修理も少しやっています。しかし何をやってみても私の心には一つも平安がなく、自らの存在に対する懐疑と未来に対する不安が募る一方でした。もがけばもがくほど深みにはまっていく自分をどうすることもできませんでした。

喜びのおとずれ

一冊の聖書に導かれて

「おい、これを読んでみないか。」

ある日、家の向かいに住んでいるじ君という友人が一冊の本を貸してくれました。それは私が初めて手にした聖書でした。彼は人生の行き詰まりの中で苦悶している私を心配して貸してくれたのです。じ君は病弱な人でしたが、音楽を鑑賞し、哲学、文学を論じ、また私にラジオの組立てと修理の手ほどきをしてくれた人でした。私にとって彼は無二の親友と言ってよいでしょう。その彼が教会に行っていることを、聖書を貸してくれた時まで知らなかったのです。

生まれて初めて手にした聖書。読んでみても内容についてはさっぱりわかりません。けれども何か非常に重々しいものを感じました。「これは普通の本とは違う」という印象を受けながら読んでいくうちに、ある時から特に「神」ということばに注目するようになりました。今まで日本人の描いていた神と、聖書が示している神とはだいぶ違うことに気づかされたのです。

よく、「がの神」と「をの神」と言われますが、人間が作り上げる神と、人間をお造りになった神とでは天と地の違いがあります。子供の頃から、いわゆる神様というところに母に背負われて出入りしたこともあり、神様にはちょっと嫌気がさしていましたが、今まで神なんかと思っていたのはだいたいこの「がの神」だったのです。

自らに求める気持ちがあったからでしょうか、聖書を読み出してからそんなに経たないうちに、私を造り、生まれさせ、生かしておられる本当の神様がいることを信じるようになりました。あの果てしなく広がる夜空を涙して眺めたことも、ラジオの組立てや修理の中でいろいろな法則と目に見えない電気を相手にしたことも、すべてが宇宙の支配者、造り主である神を知ることによって大いに役立ちました。

引力の法則を発見したあの有名なニュートンは、「私にとっては、引力の法則を発見したことより、神の存在を知ったことの方がより偉大な発見であった」と言ったそうです。私にとっても唯一の創造主を知ったことは、彼の感激に勝るとも劣らないほどの素晴らしいものでした。

一つには、私も他の人々と何ら変わることはない一人の人間であるという自己の尊厳、その価値観を持つようになったことです。世間一般では人の値打ちをその人の能力、学歴、財力、社会的地位などによって判断するのが普通です。だからこそ私のような境遇にある者は、いつ

もセルフイメージ（自己像）を低くしてしまうのです。それまでは「私は何の役にも立たない」者だと思っていました。しかし聖書には、「天と地を創造した」神が「人をご自身のかたちに創造され……神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」とあります。人間を差別せず男と女とお造り下さったのです。男と女を同じ人間としてお造り下さった神の前に、私も一人の人間だということがわかった時、私も他の人々とまったく同じ者であることを知ったのです。

次に聖書を通して知ったことは境遇についてでした。日本人はとなく、私のような者に対しては奇異の目で見えるか、忌み嫌うような態度を示します。これは日本人の思想の中に深く根差している「因縁」の教えからくるものだと思います。母親が子供に向かって「悪いことをすればあのような人だよ」などと言うのはそのことを物語ってはいないでしょうか。私は何度そのことばで悲しい経験をしたことでしょうか。

しかし聖書はこのことについて、実に素晴らしい希望の光を与えてくれました。その箇所はヨハネの福音書九章一節から三節までです。

「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。『先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。』イエスは答えられた。『この人が罪を犯したのではなく、両親で

ありません。神のわざがこの人に現われるためです。』

なんと素晴らしいことでしょうか。先祖とか前世の因縁によって今の状態に置かれているとするなら、本人は宿命としてあきらめざるを得ません。しかし主イエス・キリストは置かれている境遇を神のわざが現れるためのよきチャンスであるのだとおっしゃったのです。このおことばは私の今までの人生観を根こそぎひっくり返すことになりました。

聖書は私に語り続けました。

「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい」（一コリント六・一九、二〇）。

「聖霊の宮である体。」「自分自身のものでない体。」「神の栄光を現すための体。」「これは実に驚くべきおことばでした。今まで卑下してきた体が、神のものとして神の栄光を現すために用いてもらえるのです。あの三重苦の聖女と言われたヘレン・ケラー女史が、「私は見えない、聞こえない、話せない境遇にあるけれども、この境遇を通して同じような人々に祝福を与えることができるとすれば、私はこの境遇を神に感謝します」と言ったことばが私にも当てはまることを知りました。

「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえない者に悟りを与えます」（詩篇一一九・一三〇）。まさに「しかり、アーメン」です。

求道からバプテスマへ

U君から聖書を借りて読んでみたものの、わからないことが多かったため、間もなく教会に行きました。連れていってくれたのはU君です。父が勤務の傍らに作っていた畑用のリヤカーに乗っていきました。このリヤカーのタイヤはゴムではなく木の枠でできていたため、大きな音が出てやかましいものでした。彼はこのリヤカーをガラガラと引いて青森市の中心部にある教会まで連れていってくれました。

礼拝堂で腰掛ける場所は、決まって入り口に近い一番後ろの席。礼拝が終わると真っ先に「帰ろう」と言うのが彼です。彼は人にあいさつされたりするのが苦手で、特に女性の前に出ると顔が赤くなってしまうのです。私は残って皆さんと少しでも交わりたいと思うのですが、彼はさっさと私を背負って外に出てしまうのです。このような彼が、しかも病気がちな体でありながら私のリヤカーを引いて教会通いをさせてくれたのです。

私が教会へ出かけるためにはU君一人だけでなく、他のどれほど多くの人の手足と背中とを

煩わせたでしょうか。それだけにいろいろな経験もしました。雨降りの夜、教会の夕拝に行くのに、友人の背に負われて上から雨合羽をかぶり、自転車に乗って走る姿などは道行く人々の目を驚かすには十分です。ある日曜日の夜。やはり夕拝に行くために同じような姿で自転車で小路を走っていると、ちょうど家の中から外に出てきた一人の奥さんがこの姿を見て「キヤッ」と大きな悲鳴をあげたのにはこちらも驚いてしまいました。また、背負われている私を物珍しそうに振り返り振り返り見ている人もいました。

「十貫の身を背負われて教会に

通うわれをば人振り返る」

友人たちがどうしても時間が取れない時には、近所の子供たちに頼んでリヤカーを引いてもらって教会に行きました。一人に十円のお駄賃の約束で二人を雇うのですが、これがなかなかたいへんです。教会へ行く時は元氣よくリヤカーを引っ張ってくれるのですが、帰りが問題なのです。

「よく疲れたからお前引っ張れ。」

「それはずるいよ。ぼくだって疲れているんだから。」

「電柱一本ずつ交代で引っ張ろう。」

「もう疲れちゃった。」

そしてリヤカーは止まってしまいます。

こんな具合で本当に困ったものでした。途中で子供たちに家に帰られてしまい、街のど真ん中に置き去りにされたら一大事です。結局は賃金の五円増しで交渉が妥結し、無事に家に戻れたこともたびたびでした。こんな時などは、自分の足で自由に歩いて教会に行けないもどかしさをつくづくと感じたものです。それでも神を求める思いはますます募る一方で、教会へ行くためにいろいろな方法で人手を探し、求道生活を続けたのです。

こうして昭和二十四年（一九四九年）四月十七日、主イエス・キリストが死を打ち破られた記念すべき勝利の日であるイースターにバプテスマ（洗礼）を受けることになりました。牧師先生には、少々早すぎるのではという懸念もあったようですが、こちらの一途な熱意をくんで許して下さったのです。賛美歌も、牧師先生の「父と、子と、聖霊のみ名によって洗礼を授ける」との厳かな声も、すべては私への天よりの祝福でした。参会者の中にはじ君はもろんのこと、私の教会通いに心から協力してくれた幾人かの友人たちもいました。みんなが、私の神の子としてのスタートを精一杯祝福してくれたのです。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます」という聖書のことばがその通りになりました。一人の人間として人間らしく

生きたいと求め、捜していたものが与えられ、見つけ出されて、ここに神に従って生きていく新しい門が開かれたのです。ガラガラと音を立ててリヤカーで教会に連れてきてもらったことも、雨合羽を上からかぶって自転車で夕拝に出席したことや子供たちのご機嫌を取りながら教会の行き帰りをしたことも、そこには求める者に答えて下さる神の豊かなあわれみを見るのです。良き友を与えて下さり、さらに状況をも取り計らって下さった父なるみ神の恵みをほめたたえるほかありません。

喜びにあふれて

自分の喜びを人に伝えるなど夢にも考えられなかった哀れな男が、リヤカーの中から、あるいはその上から、「皆さん、私はイエス・キリストを信じているクリスチャンの一人です」と叫んで道行く人々に向けて路傍伝道をするようになったのは、バプテスマを受けてから間もなくの頃でした。かつては自分の姿を見られるのが恥のように思えたのに、今は神から来る平安と喜びと確信にあふれて堂々と人前に自分の姿をさらけ出せるようになったのです。

叫ぶ声も始めの頃は低い声しか出ませんでした。のどから血が出たり、声が出なくなってしまうこともありました。しかし、このようなことを乗り越え、現在のような大きな声が出る



冬の路傍伝道（青森市にて）

ようになったのです。風の吹く向きによって、
は、「あなたの路傍伝道の声が、三百メートル先の私の家まで聞こえましたよ」と言われるようにさえたのです。

ある時には、リヤカーの中から人々にイエス・キリストを宣べ伝えているところに酔っ払いがやって来て、「おいお前、人に話をするのになんなものに乗って話すとは失礼だぞ」と叫んで、私の乗っているリヤカーをガタガタと揺さぶることもありました。また、周りの人だかりの中から一人のおばあさんが出てきて津軽弁で「神様どの人だべ。この人だが（神様どの人ですか。この人ですか）」と言ってリヤカーの中に十円玉を投げ入れたこともありました。これには驚きました。滑稽な話ですが、日本人特有のなんでも神様に仕立

て上げておさい錢をあげる習慣が、こんな形でも行われたのです。十円のおさい錢をすぐに返したのはもちろんのことです。

あわやというところで神様になりそこねた私ですが、ある日、実に弱ったことが起こりました。

いつものように路傍伝道をしていると、私の周りにたくさんの方の輪ができました。すると、その輪の中から突然一人のおばあさんがひょっこりと出てきたのです。見ると、田舎から出てきた私の祖母です。人だかりができ、中で何か話しているので人をかき分けて出てみたら、なんとあの手足の不自由な自分の孫がリヤカーに乗って熱弁をふるっているではありませんか。祖母を見た私も驚きましたが、孫の私の姿を見た祖母のショックもまた大きいものでした。家に戻ってから早速お説教です。

「あんな恥さらしはやめなさい。あそこは田舎から出てくる人たちの通る所だから、知っている人に見られたら恥ずかしい」と、きついおしかりを受けました。これには少々まいりましたが、このような情にはだされてはいけないと心を固めて、ますますこの路傍伝道に心を燃やしたものです。

救いを得た喜びを現すのに路傍伝道だけでは何かしらまだ物足りなさを覚えていたところに、青森市郊外にある国立癩療養所の松ヶ丘保養園での奉仕の道が開かれました。神のみこと

ばを語れるという喜びと、一抹の不安との入りまじる中で出かけました。初めて見る患者の姿に、自分の姿などそっちのけにしてただ驚きの目を見張るばかりでした。私の気持ちは動揺しました。そして恐れ的心さえわいてきたのです。

「よく来てくれました」「主よ感謝します」「また来て下さい」と、こんな者に対しても大歓迎してくれた皆さんの気持ちに対して、なんと恥ずかしく申し訳ないことか。「主よ、どうぞこの者から恐れ的心を取り除き、外側からの格好のよい偽善的な交わりではなく、内なるものから出る真実の交わりができるように助けて下さい」と心から祈られました。

その祈りは答えられ、次の訪問時にはまったく恐れが取り除かれていました。集会が終わった後で患者さんのお部屋にまで入れていただき、一緒にお茶を飲み、漬物を食べて楽しい時を持つことができたのです。ある宣教師は、「この癩園は天国の支部のようです」と言いましたが、逆境も体のハンディーも乗り越え、喜びに満ちて主の栄光をたたえている光景こそまさに天国の支部そのものです。自分自身もこのような喜びにあふれている仲間に加えられることに感謝を込めて、癩園訪問初期の頃にこのような歌を作ったものです。

「郭公の声聞こゆる教会に」

癩患のささく祈りはつづく」

あれからもう三十年。今もなお、主イエス・キリストにある素晴らしい交わりが続いていま

す。お互いに朽ちる体を持ちながらの人生の旅路ですが、この栄光の望みにあずかせて下さった神に感謝しつつやがて朽ちない栄光の体に化せられるその日その時を望んで歩んでいるのです。

訪問は癩園だけではありません。結核の療養所もたびたび訪ねたものです。ある時は病室で、またある時は外の草っ原に座って神の恵みを証しするのが私にとっては何よりの喜びでした。

療養所までの山道を背負われていくのですが、真夏などは一人が脇から日傘を差ししてくれて、もう一人は扇子で風を送るという、至れり尽くせりの有様でした。「あんたは皇太子殿下より偉いじゃないか。皇太子殿下だって人に背負われて脇から扇子で風を送ってもらうなんてしないよ」などとかかわれましたが、「本当にそうだ。今は神の皇太子なんだ」と、背中を通して伝わってくる友の汗を感じながら思ったものです。神の恵みは、こんな素晴らしいクリスチャンの兄弟姉妹を与えて下さり、こんなにも私を高く引き上げて下さったのだと、限りない感謝と喜びにあふれるのでした。

神が与えて下さった花嫁

この喜びをもっと広く、あの人にもこの人にも、ここにもあそこにもと、心が高まるにつれて一つの大きな障害に直面しなければなりませんでした。

それは、自分で自由に外に出ていけないということでした。このことは今に始まったわけではなく、幼い時から求道中に至るまで、嫌というほど経験させられてきたことです。けれども今は、それ以上に重く自分の身に降りかかるのを覚えました。キリストの証人としてもっと活発に行動したいと望めば望むほど、それができない自分の現実を思い知らされ、深いジレンマに落ち込んでいました。

良い助け手が与えられたらどんなに幸いだろうかと思っではみても、それはどこまでも理想の領域であって、現実はそのなかに甘いものではないことは百も承知していました。一級身体障害者で、そのうえなんの学歴もなく、金持ちでもないとなれば、結婚を望むなどは、身のほど知らずもはなはだしいと言わなければなりません。それにしても、何か他の人より優れたものを持ち合わせていたなら……。たとえば、美声で歌うとか、美男子であるとか……。こんな愚

かなことを考えながら、日増しに身の不便さを感じながらも半ばあきらめムードの中で日々を過ごしていたのでした。

ある日、山本幸子さんという一人の女子学生が私のところに訪ねてきました。割合に背も高く、直観的に美しい人だと思いました。彼女については他のクリスチャンを通して聞かされていました。入院中の宣教師から福音を聞いて二日目で信じたということや、信じた後で次から次へと友人を宣教師の病室に連れていっていることなどです。

私はそのことを聞いて、「その学生は宣教師かぶれの女の子だよ」とあまり気にも留めないでいたのですが、会って話してみると、福音の根本をすっかりつかんでいるようですし、主イエス・キリストに対する若い情熱をもって救霊の思いに燃えていることがわかりました。「その学生は宣教師かぶれだ」などと言ってしまったて、なんだか申し訳ないという気持ちで初対面をすませました。

この女性がやがて私の妻になるとは、神様はなんと恵み深く、ユーモアに富んでおられるお方なのだろうと思うのです。

彼女の路傍伝道での働きは目覚ましいものがありました。あっちに走り、こっちに来ては、道行く人々にトラクトを手渡すのです。路傍伝道が終わって、みんなが集会のために会場に向かっている間、彼女は道に立ち止まって人々を集会に誘うのでした。よく道端から人々を集会

に連れてきました。時には浮浪者を連れてきたり、どこかの施設から脱走した者を連れてくるなど、後始末に困ることさえあるほどでした。

しかし、彼女が喜びに満ちて福音を証しするその燃える思いをだれが止めることができるでしょうか。だれかがこう言いました。「もし、山本姉妹の福音を証しすることを止めれば、石でも叫ぶでしょう」と。

彼女のこのような一途な姿を見ているうちに、私の心は彼女に引かれていく何かを感じ始めたのです。自分が伝道集会で語っている時、彼女がその場にいとなく力がわいてくるし、汽車の時間に合わせてその場から立ち去っていくと、途端に力が抜けて語る意欲がなくなってしまう有様でした。なんと情けないことよと、きつく自分に言い聞かせてもまったく効き目がありません。どんなにか、主イエス・キリストにある兄弟姉妹として純粋な気持ちで、冷静にならなければと葛藤したことでしょう。

彼女が私を教会に送り迎える仲間に加わってくれるようになって、私のリヤカーを引いてくれる時などは、「この人が私の助け手になってくれて、福音のためにいつもこのように二人でできたら、どんなに素晴らしいだろう」と、口には出さないけれども、心の奥深いところで悶々としていたのです。

そうこうしているうちに、私はこの願いを大胆にも神に訴え始めたのです。旧約聖書ヨシュ

ア記の一四章にカレブのことが出てきます。彼は八十五歳になっても、四十年前に神が与える
と約束された山地を、今、私に与えて下さいと求めたのです。彼の堂々とした勇氣と信仰とを
私は学びました。カレブが山地を与えて下さいと求めたように、私も山本姉妹という「山」を
与えて下さいと求めようと決心したのです。

自分勝手な祈りかもしれませんが、「主よ、私に「山」を与えて下さい」という祈りは、恥
をも恐れない大胆な勇氣と、状況を越えた信仰が必要でした。祈っていないながら不安になったこ
ともありました。あまりにも無茶なことではないのか、物笑いの種になるのではないか、恥を
かくだけではないのか。このような様な思いが祈ろうとする心にブレーキをかけることもあ
りましたが、ともかく必死に祈り続けたのです。「主よ。この山（山本姉妹）を与えて下さい」
と。

「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あ
なたがたの願い事を神に知っていただきなさい」（ピリピ四・六）。

神に自分の願い事を知っていただくというのは実に素晴らしいことであり、確信と平安への
秘訣です。やがて神はご自身のみ旨を彼女にも示され、ついに「山」は私に与えられることと
なりました。神は私の願い事を知って下さっただけでなく、その願い事の実現のために、すべ
ての点においてお取り計らい下さいました。

身のほど知らずの者の祈りに、神は恥をお与えになりませんでした。生きて、祈りに答える
神の勝利をお示しになりました。まさに「祈りは勝ちです」。

結婚への険しい道のり

しかし、いざ結婚となると、多くの難関を突破しなければなりません。ことに、当時看護学
院の生徒であった彼女にとっては、その学院を中退することや両親の了解と結婚の承諾を得る
こと、その他の周囲の者の無理解など、大きな試練を通らなければなりません。あまり
にも激しい反対の渦中にある彼女を見て気の毒になった私は、「この結婚をやめにしようか」
と言ったほどです。しかし彼女は、「神のみ旨で始まったことなんだから」と、その決意を翻
さなかったのです。

彼女の上にのしかかった結婚反対の圧力は、多少の違いがあるにせよ、当然もう一人の当事
者である私にも降りかかってきました。本質的な反対の理由は、やはり経済の問題です。結婚
はしても、どうやって生活するのかと、だから異口同音に問われるのに対して、答えるこ
ととはただ一つ、「主は私の羊飼ひ。私は、乏しいことはありません」という詩篇二三篇一節
のおことばだけでした。もちろん未信者の人たちには、「主は私の羊飼ひ……」などと言って

みてもわかるはずなどありません。

「神が天からお金や食べ物而降らしてくれるとしても言うのか」と、心配のあげく、むしろ非難さえするので。そんなことになるのは覚悟の上であつたとはいえ、いざとなつてみると八方ふさがりの中で孤軍奮闘している自分自身が、哀れに感じられて仕方がなかったものでした。そんな時、「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう」という聖書のみことばによって、どれだけ勇氣と励ましとを受けたことでしょうか。そのひとり子イエス・キリストをお与えになれるほどの大きな愛をお持ちの神に力づけられて、「この結婚という難関に自分一人で立ち向かっているのではない、愛なるみ神が共にいて助けて下さるのだ」という信仰の確信に立てたのでした。

愛の花束

いよいよ結婚式の日も近くなつてきた時、私の心の中に、花嫁に対して自分からも何かをしてあげたいという思いが強くなりました。結婚は女性にとって一生に一度の華やかな、そして晴れがましい日であるはずなのに、ウェディングドレスもなく、普通の紺色のツーピースに花嫁自身が作ったベールをかぶるだけだったからです。手袋と靴も友人からの借り物です。しか

も両親からは祝福されず、勘当のままに結婚式に臨まなければならない彼女を少しでも慰めたかったのです。

思い立った私は、日曜学校に来ている子供たちに頼んでリヤカーを引いてもらい、青森市内の大きな花屋さんに行きました。そこで一目見て「これだ!」と思った一つの花束に心が捕らえられました。この花束を当日花嫁に持たせることができたなら……。こう思った私は、勇氣を出してお店の人に尋ねました。

「おばさん、この花束おいくらですか。」

「これは人に頼まれているものなんだが、あんたが欲しければ五百円で売るよ。」

五百円! 大きなショックを受けました。これから自分たちが生活していくために手もとにあるお金の三分の一に当たる金額だったからです。店先でいろいろと考えたあげく、どうしても花嫁にその花束を持たせたいという思いが勝ちました。

五百円は、当時の私にとって大きな犠牲だったのです。

結婚後、花束を手にして満足そうにしている花嫁の姿を写真で見るたびに、やれるだけのことをしてやれてよかったと思うのです。

昭和三十年(一九五五年)四月十六日、結婚式当日。タクシー代を節約するため、リヤカーで式場に行くつもりでした。花婿がリヤカーに乗って式場に向かうのも型破りでおもしろい

てこられた方々の服装も、普段とあまり変わりがなく、いつものクリスチャンの集まりをしているかのような錯覚さえ持ったものです。しかし現実には、「あの山を与えて下さい」と祈った相手の山本姉妹が贈られた五百円の花束をしっかりと胸に抱いて私の隣に並んで座っているのです。「これはいつもの集会ではないんだ。自分の結婚式なんだ。」自分自身に言い聞かせながら、花婿であるわれに返るのでした。

「いよいよこれから出発だね。」隣の花嫁がポツリと言いました。
「うん。」

私共の結婚式は他の多くの方々の結婚式のように盛大なものでもなく、また、華やかなものでもありませんでした。けれども一番幸いに思えるのは、その式場には目には見えなくても、その昔、カナの婚礼に出席されて水をぶどう酒に変え、婚礼の場を祝された主イエス・キリストが共にいて私共の結婚式を祝福して下さったということです。それはどんなにすてきな花嫁衣装よりも、どんな豪華な式場やレセプションにも勝る素晴らしい祝福です。

そこには、「人はその父と母を離れ……ふたりは一心同体となる」と結婚の奥義を示しておられる神からの、平安と慰めと導きとがあるからです。



結婚式の当日（一九五五年四月十六日）

はないか。昔、天下の御意見番といわれた大久保彦左衛門が駕籠に乘らず、魚屋の魚を入れる桶に乗って江戸城に行った話を読んだことがありますが、自分も「大久保彦左衛門」気取りで行くんだと自分を納得させていたのです。

ところが私の結婚のことを聞いたあるクリスチャンから、お祝いとして二百円のお金を手紙と一緒に送られてきました。しかもその手紙には、「結婚式のために役立てて下さい」と書かれてあります。これには本当に感謝しました。このお金で、花婿はリヤカーではなく、タクシーに乗って式場へと向かったのです。

結婚式は出席者も二十名そこそこで、お茶とお菓子のとても質素なものでした。集まっ

いよいよ二人でスタート

夫は二十七歳。妻は二十歳の誕生日二日前の十九歳。私共の新婚生活は二人の間に甘いムードはあっても、決して楽なものではありません。

「あの二人は小説みたいな現実離れた結婚をしたけれども、そのうちきつと離婚するに決まってるよ」ともっぱら思われていただけに、周囲から私共に注がれる目は厳しく、「いつまで続くだろう」という好奇心をもって見られるのは、たいへんつらいことでした。

私がクリスチャンになって間もない頃のことです。幾人かの友人たちが私のところに集まって、いろいろなことを話し合っていました。独身の若者だけに「結婚話」に花が咲きました。そして、この話題の行き着いたところは、「愛も結局は状況によって変わるし、経済力もなければ長続きしないで破局が来るのは当然だ」ということでした。このようなことは、今までに現実の問題として数多く見聞きしてきたのは事実です。でも真実の愛とはそんなものではないと信じている私は、彼らに反論したものです。

「本当の愛とはそんなものではない。状況によって変わったり、経済力に左右されるような愛は本物ではない。本当の愛は、どんな状況をも事情をも超越するはずだ」と。



新婚当時（家の近くで）

これに対して友人はあざ笑うかのように、「お前の言っていることは理想論だよ。考えが甘すぎるんだ。現実はそのまんじやないよ」とさんざん言われたものです。

売りことばに買いことばではありませんが、とうとう「もし私が結婚するなら、そういう結婚を試みるから」と大胆にも言い切っていました。

別にそういう相手がいたわけでもなく、簡単に現れるはずもないと思っていた時だけに、「しまった。大それたことを言ってしまった」と思いましたが後の祭りです。しかし、それから幾年も経たないうちに、あの語り合った仲間の中で結婚の一番手となったのが私でした。しかも身体に障害を持ち、そのうえに経済力には乏しく、結婚の条件にはま

まったく不合格のような状況下にある者が最初に結婚したとは皮肉もはなはだしいといわなければなりません。

世間のうわさやいいかげんな推測などはともかくとして、日常生活の中で大きな困難を覚えさせられたものは、やはり経済的なことでした。結婚式が終わってこれからの生活費として残ったお金はわずか七百円。二人共貯金はゼロ。これという収入の当てもないままのスタートです。困難は当然のことです。朝はパン一切れ、昼は生うどんにしよう油、夜はおかゆにみそ汁。これがだいたい一日のメニューです。田舎に伝道に行つて農家の方から頂いたトマト四個が、その日一日の糧のすべてとなったこともありました。

ある時、こんな笑い話のようなことがありました。田舎に伝道に行った際に、知り合いのおばあさんのところを訪ねてみました。私共二人を快く迎えてくれたそのおばあさんが、妻をしげしげと眺めてから私の方を向いて、「お前、やっぱり前の奥さんに逃げられたのか。前の奥さんは少し太っていたけど、今の人はやせているね」と言うのです。これには少々まいりました。同一人物ではあるけれども、パン一切れやトマト四個などの生活で太っていられるはずはないのです。

このような、食うや食わずの困窮した生活の中でこそ、ますます夫婦にとっての愛の貴さを教えられ学ばせられました。そして、神のみことばである聖書が私共の人生の基盤であり、

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」のおことばを、身をもつて経験することができました。

「日ごとの糧を今日もお与え下さい」と真剣に祈り求める日々の生活の中で、「野菜を食べて愛し合うのは、肥えた牛を食べて憎み合うのにまさる」、「一切れのかわいたパンがあつて、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる」という箴言のおことばは、当時の私共二人にとっては本当にびつたりのおことばでした。たとえ満腹にならなくても、平和であつて愛に満たされている生活が、物質的なものには十分満たされていても、平和に欠け、愛に乏しい家庭よりも、どんなに人間としての豊かさに満ちた人生を過ごせることでしょうか。このような貴重な経験を通して、私共夫婦の愛の絆はさらに強くがっちり結びあはれて今日に至ったのです。

私共の困難な実情を知っておられる神は、実にその時々に応じて不思議な方法で助けて下さいました。それは祈りに答えて下さる、今も生きて働かれる神の素晴らしいわざなのです。

朝食のパンをかうお金もなく、いよいよ明朝は断食にしようと思つていたある日の夕方のことです。近所に住む知り合いの女医さんが突然やつて来て、「三橋さん。家でパンを買い過ぎで残っちゃったの。少し固くなったけど食べて下さい」と言うのです。これこそ箴言で言う「かわいたパン」です。この突然の差し入れによって私共は断食せずにすみました。

結婚した年の夏も過ぎ、私たちの住んでいる青森にもそろそろ秋の気配が感じられる頃のことでした。親しくお交わりをしていた教会が行う天幕伝道集会で証しをするようにと頼まれて出かけました。その時に紹介されたのがF先生というカナダ人の老夫妻です。この二人は、中国大陸で主イエス・キリストの福音を伝えていたのですが、中国が共産化したためにそこにいることができなくなって、日本に來られた方でした。

やがて集会も終わり、帰りのあいさつをしたところ、ご主人の方から「明日、私のところにお交わりにいらつしゃいませんか」とお誘いを受けました。翌日お伺いして、いろいろと話合っているうちに、日本語を教えている先生が休んでいるので、十日間ほど宣教師たちに日本語を教えるのを手伝ってくれないかと頼まれました。この老夫妻は、あるミッシェンの日本語学校の責任者だったのです。この申し出を引き受けさせていただき、それから十日間、自転車にリヤカーを連結させて四キロほどの道のりを、日本語を教えるために通いました。

F夫妻とは、親しくなるにつれて、その深い信仰と温かい人柄とに触れさせていただきました。F先生ではなく、Fさんと呼ばせていただいたくらいです。

やがて約束の十日間を終わった日、Fさんから「これは今日までのあなたたちの報酬です。それから、今度の十月から来年の三月までの六か月間、正式に日本語教師として働いてくれませんか」と言いながら封筒を手渡されたのです。もちろん、私共は報酬など考えてもいません

でした。田舎に行つて伝道するのも、宣教師の方々の日本語の勉強をお手伝いするのも同じ主のための働きなのだからと思つていたのです。そして、また六か月間日本語教師として雇っていただけるというのは、なんとという感謝なことでしょうか。青森の冬は寒さが厳しく、そのためにいろいろな面での冬支度をしなければならぬのに、費用がないのでどうしようかと思つていた時だったのです。

十月からのことを決めてから帰宅する途中、どうも先ほどの封筒が気になってしょうがありません。そこで道端に自転車をとめて封を切りました。なんと六千円入っているではありませんか。私共にとっては思いがけない大金です。二人がその場で恵み深い主に心から感謝をささげたのはもちろんのことです。このお金で、まず二人のレインコートを買いました。それまではコートがないために、雨の日は外出を控えたり、また途中で雨に降られると、本当に困っていたのです。

このように、F夫妻との出会いは私共夫婦に数多くの祝福をもたらしてくれました。やがて正式に日本語教師となつて初給料を手にした時の感動を今も忘れることができます。人の世話だけを受けてきた者が、生まれて初めて自分がしたことに対する報酬を頂いたのでした。

妻にとつてもそうです。高校卒業後、看護学院を中退しての結婚で、給料を頂いた経験がなかったのです。私共はこの初給料で妻のために女性用の自転車を買い、私のためには、今まで

乗っていた大きなリヤカーを小型に造り替えてもらいました。それまで妻は、宣教師から借りた男性用の自転車で大きなリヤカーを引っ張っていたのです。

日本語教師としての六か月間は、結婚してからそれまでになかったほど満たされた生活でした。もう生うどんにしょう油をかけて食べることもなければ、おかゆも必要なくなりました。冬の厳しい寒さをしのぐだけの衣服も燃料も買うことができました。私共夫婦は結婚後その時までゆつくりとくつろいで十分に食事を取ったことがありませんでした。青森の冬の夜長を、私共夫婦は神の恵みの偉大さを語り合いつつ過ごしたものです。

この期間中に、以前から祈り求めていた聖書学院への入学の道が開かれ、そのために必要な学費も少しは蓄えることができたのです。

眞実を求めて

三橋 幸子

私の名前は、「幸いな子」と書いて幸子と読みます。バプテスマ（洗礼）の時、授けて下さった方が、間違えて幸子と神様の前に読み上げたため、この時から自分の名前を意識するようになりました。親が幸いな子であるようにと願いを込めてつけたにちがいないのですが、このバプテスマの時ほど、神に受け入れられ、神の子としての立場を与えられて本当に幸いな子となった実感をかみしめたことはありません。

この時、雲間からは虹が美しく輝いていました。（後に結婚に導かれることになる）三橋さんが、「山本さん、虹の意味がわかりますか」と聞きました。「旧約聖書の中に、神様が人と平和を結ばれたしるしに虹を空にかけて、美しい光景を示して下さったのですよ。こんな季節に虹を見るのは珍しいことです。今日は、神があなたのバプテスマを祝福されて、神との平和を現して下さい」



のでしょう」と教えてくれました。

肌を刺すような寒風の中で感激のバプテスマを受けたのは、昭和二十九年（一九五四年）一月二日のことでした。海から上がって、ぬれた素足で雪の上を歩いた時のあの冷たさは、まるで頭のしんまで伝わってくるようでした。寒がりの私でしたが、内なるものは、喜びと平安、主に従おうとする情熱に燃え、誠に幸いそのものだったのです。

そのような中で、私は厚いオーバーコートを着、身をかがめるようにして三橋さんのそりを引き、二人は澄みきった冬の天空に美しく輝く虹を見ました。それから一年後に、二人が一体となってこのような生涯を踏み出すとは、だれも考えてもみなかったことでしょう。

幼少時代

私は、昭和十年（一九三五年）四月十八日、八人兄弟の四女として青森県南津軽郡柏木町で生まれました。当時呉服屋をして繁盛していた家は、ある人のねたみにより、人手に渡ってしまいました。腹を立てた父は、姉を満州駐在の軍人に嫁がせたことから、一家を満州に引き連れて一旗揚げようと山師的なことを考えたのです。持てるだけの衣類、食器、家具といった家財を携えて満州へ行くことになりました。その前に、再び日本が恋しくならないようにと、私

たちに日本の多くの名所を見物させてくれました。家族九人で何か月かをかけて旅館に泊まり、人力車に乗り、いろいろな所を見物したのです。奈良の大仏を見たこと、干バナナを買って食べたこと、上野の動物園で迷子になったことも、はっきりと記憶に残っています。

ところが、いざ満州に行ってみると、気候や食物、水が合わなくて、母以外は体調をこわし、皆病氣になってしまいました。また、私たちが入れるような日本人の学校ありませんでした。ある時、一人わびしく茶わんのかけらを持って遊んでいる私の姿を見た父が聞きました。

「幸子、大きくなったら何になりたいか。」

「学校の先生になりたい。」

無心に答える私を見て、父は涙が出てきて仕方がなかったそうです。子供たちを学校にも入れず、こんな生活をさせてはいけないと思い立ち、持っていたたくさんの衣類や食器類を売り払って日本に帰ることにしたのです。

その後間もなく戦争となり、一緒だった日本の方々が後々悲惨な状態になったことを聞くにつけ、この時、父が私の姿を見て帰国を決意したことは、今となっては神の摂理を思わされることです。

満州から帰国して間もなく、一番上の兄が仏所護念会（当時「霊友会」と言われていた）の信仰を持ち込んできました。長男を重んじる時代でしたから、両親も歓迎し、やがて家族中の者

が信じるようになりました。私たちは朝夕の食事前に三十分ほどかかるお経を読経してからでなければ食事にありつけませんでした。特に母は信仰深く、そんな母の姿を見て、私も小学校二年生の頃から一生懸命お経を上げ、書くことをまねていたものです。母と一緒に集会にも出席し、他の人々にも伝えなければと、子供ながらに考えていました。

真実を求めて

やがて、中学、高校と、町から数十キロ離れたカトリック系のミッションスクールに汽車通学するようになりました。終戦後間もない時代のミッションスクールだけに、だれもがあこがれていた学校です。校舎も洋風であり、カナダ人の校長先生をはじめ、多くの外人のシスターたちが教鞭をとっていたため、集まった生徒たちもまた優秀な人たちでした。疎開先の田舎町から通学していた私にとっては、見るもの、聞くもの、学ぶもの、何もかもが皆珍しく、楽しい中学時代が過ぎ去っていきました。

当時私の家は祖母、甥を入れて九人の大家族でした。兄は大学、弟は大学付属中学、妹、甥は小学校、私は私立高校と食べ盛りで学費のかかる子供たちがそろった子育て時代で、家計のやりくりがたいへんな時だったのです。

父は子供たちが勉強するより、家計を助けるために働くことを強く望んでいたようです。母は、執念とでもいうべきでしょうか、父が反対しようが怒ろうが、「子供たちを学校に入れなくては」と、行商をしながら私たちを励ましてくれたものでした。けれども、父が二言目には「学校へ行くのをやめて働け」と言って怒りちらす姿が私にはたまらなく嫌だったのです。父のいない日が楽しみであり、父に対して憎悪感さえ抱くようになりました。そのような自分の心に対して私は悩んだものです。

祖母が亡くなってからは炊事、洗濯など家事一切を私がすることになり、日曜日には畑仕事までさせられました。中学時代と違って勉強もむずかしくなる一方ですし、大学へは進学したいと、私の気持ちはあせってばかりでした。

そんな中でも、友達に対しては何事によらずライバル意識を燃やしたものです。当然能力的にも経済的にも時間的にも、対抗できるはずもない自分を発見した時、いらだちとねたみのあまり、自分の置かれている境遇と、自分自身の存在価値をのろいました。見るもの、聞くもの、「なぜ」「どうして」の批判的思いの中で、何のための勉強だろうか、生きるとは、真実に生きるとは、愛するとはと、私の懷疑心は募る一方だったのです。

トルストイの『人生論』、三木清の『人生論ノート』などの本を読みあさったのもこの時代です。また、深い感動と共感を覚えて読んだ、ある女子学生の手記『紫煙（浅間山の噴火口）の

かなた』は、今も忘れることができません。彼女は、一步步いては一步步振り向き、自分の歩んだ道を確かめたのです。真実に歩みたい、だが歩めない。醜い自分を嘆き、紫煙のかなたに消えていったのです。私もまた、自分自身の内なるものの醜さと魂の葛藤の中で、彼女のように紫煙のかなたに消えてしまいたい心境に幾度なったことでしょうか。

そして、幼い時から信じさせられてきた信仰に対する疑問、疑惑を、カトリックの信仰と比較して解決しようとするようになりました。白いベールをかぶり、ロザリオを手にし、み堂で祈るシスターの姿に、乙女心は当然のようにひかれていきました。その後、宗教的な様々な行事にも進んで参加し、私もあのシスターのようになりたいとあこがれたものです。

しかしその反面、仏教との比較、「何が真の宗教なのか」、「どこに真の救いがあるのか」など、さらに深く知りたいと思い、シスターたちにもいろいろと質問してみました。けれども、納得のいくような返答が得られず、心の満たされないまま、いろいろな先生方にも、人生観などについて、しきりに聞きました。しかし、そこで「悩みがあなたの友達なのですか」とあざけるように言われ、私の心は痛みました。先生方に対しては、信頼どころか強い不信感さえ抱くようになったのです。

そんなある日、ふとしたことから、病院に入院している宣教師を紹介されました。彼は日本を愛し、汚いアパートの一室を借り、そこで自炊し、日本食を食べながら、貧しさにとけ込ん

で宣教している人でした。そして、とうとう結核で倒れ、喀血^{かっけつ}して入院したということです。私は非常な感動を覚えました。当時のカトリックの神父たちの生活はとてもぜいたくに思え、貧しい生活をしてきた私は、これではどうして私共の貧しさや悲しさを理解することはできないだろうという批判的な気持ちでいっぱいだったからです。

その宣教師から小冊子を頂き、帰宅途中の夜行列車の中で一心に読んでいたことを、今もよく覚えています。「イエス・キリストを信じるなら救われる」という文章に、期待していたより内容が単純なのに驚きました。簡単には信じるまい、こんなにも悩んでいるのだからと心に決めていたものの、次の日も、私の足は宣教師のところへ向いていきました。昨日会ったばかりの私のことを祈ってくれたのでしょうか。確信に満ちた語調でこう言うのです。

『『あなたの心の中にある罪を、みなこの紙に書きましょう。それをあなたの背中に張って町の中を歩きなさい』と言ったら、あなたは喜んで歩きますか』と。もちろん、喜んで歩くはずはありません。けれども、なぜかこの時、全能なる神がすべてを見透かしておられることに、いたく恐れを感じたのです。

神ならぬ神を幼い時から拝み仕えてきたことが、自分の醜さ以上に大きな罪であることも知らされました。もし私のような者であっても、罪を赦され、悩みから解放されて、この偉大な神の懷に抱かれることができるのであればと、その場にひざまずいて祈りました。

その時から私の心は変わりました。神のご臨在に触れたからです。重い石ころが転がり落ちたように心は軽やかになり、平安の涙があふれ、そして喜びに満たされました。神様のためならば、どんなことにでも従いますと、激しい情熱に燃え始めたのです。

バプテスマの前夜

信仰告白をした二か月後、バプテスマを受けました。教会に行き始めてから日数も経っておらず、ごく一部の兄弟のほかは、あまり交わりもありませんでしたが、その仲間に加えられる喜びと共に、これからの責任に対して非常な厳肅さを感じたものです。

それだけに、神に一生涯従っていくのには固い決意がなければと思います、バプテスマの前夜、井戸から水をくみ、雪の降る寒い夜空の下で冷水をかぶったのです（今にして思えば滑稽な話ですが、幼い時から父母の仏教的信仰を見てきたせいでしょう）。自分としては明日のバプテスマの予行演習のつもりでやったことでした。

冷水をかぶった後は、寒いどころか体がボカボカしてきました。素肌に丹前を羽織っただけの私は、長時間その決意のほどを日記に書き記していました。当時は、室内を暖める石油ストーブもなく、深々と更けていく真冬の真夜中に、火の気のない部屋で夢中で書いているうち

に、ふと寒気を感じました。急いで寢床にもぐり込みましたが、すでに遅く、発熱してきたのです。翌朝起きた時は頭が重くて体がだるく、すっかり風邪をひいてしまっていました。

ところがその時私は、風邪はひいても心はずんでいましたから、全能なる神様は必ずいやして下さるという単純な信仰に立ち、少しのためらいもなくバプテスマに臨んだのです。バプテスマを受ける海岸に行く前に、信仰に導いて下さった宣教師（当時、まだ入院中）のころへあいさつに寄りました。彼は自分が病人であるだけに病氣のことには敏感なのでしょう、私が風邪をひいて熱があることがわかったようです。

「このバプテスマは取りやめましょう。すぐに連絡しましょう。」

こう言う宣教師に、私はあわてて、主に対する絶対の信頼と自分の決意のほどを強調し、「あなたがたの信仰のとおりになれ」というみことばに従い、古い自分と共に風邪も葬りますと言い張ったものです。

バプテスマを受けて宣教師のところへ再びあいさつに行った時は、主に従えた感激と感謝と賛美で心はいっぱいでした。

風邪は波と共に去りました。身も心もなんと喜びに満たされていたことでしょう。

宣教師はこの時の記念に、「世人の咎のために死にたまひし主イエスを仰ぎし時、この身は救われたり。賛美せよ、賛美せよ、われ救われたり。賛美せよ、賛美せよ、われ救われたり」

という賛美歌を教えてくださいました。その後も、この賛美歌を歌うたびにその光景を思い出し、救われた時の感謝を新たにしています。

看護婦を目指して

幼い時から学校の先生になりたいという願いをずっと持ち続けていた私は、高校を卒業してから教育大に入り、小学校の先生になるのが夢でした。

しかし、福音を聞いた場所が病院だったため、その願いは、周りの人たちと触れながら、悩んだり、悲しんだり、この人たちの友となり神の福音を宣べ伝えたいという思いに変えられていったのです。もし神のみこころなら、看護学院に入り、看護婦となって神に仕えたいと願うようになりました。病院を畑としてそこで働くか、看護婦の技術を持って海外に出かけるか、いずれにしろ、神のみこころならばその仕事につきたいと思ったのです。

そして、みこころならばと願いつつ試験の日を迎えました。当日、少しの時間の合間をみて、みことばを読んでいたところ、「主はあなたの心の願いをかなえてくださる。あなたの道を主にゆだねよ。……あなたの義を光のように……輝かされる」(詩篇三七・四一六)という箇所が目にとまりました。このみことばを読んだ時、神様は私の気持ちを知られて願いをかなえて下さるにちがいないという確信が与えられたのです。

試験の後、まっすぐ三橋さんのところへ行って「神様は看護婦の試験に合格させて下さいませ」と宣言しました。

しかし、どうしたことでしょう。合格発表の日、名簿に私の名前が載っていないではありませんか。

高校の担任の先生は、就職のことを心配し、「看護学院を落ちたのですから、別の就職口を探しましょう」と言っておきました。兄も自分の職業柄、看護婦の職場を見つけれられるからと、「履歴書を書きなさい。なぜぐずぐずしているのか」と、怒りを込めた口調でせき立てます。私が素直に従わないでいると、非常に腹を立て、顔をてのひらで打ちつけました。しかし私には、神がその道を開いて下さるのだから、まだ待つべきだという思いがあったのです。兄には反抗的に見えたかもしれませんが。

たたかれた痛さと悲しさで、私は外に飛び出しました。そして、いつものように土手で神様に叫んだのです。叫びつつ、聖書を手にとった時にあの試験の日にごえられた詩篇三七篇の、七節以下のみことばが目に入ってきました。「主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな……。」

「そうだ。私は神様のみ手の中にあるのだから、神様が自分を導いて下さるにちがいない。」

だから忍耐深く待つべきなのだ。」

こう考えると、ようやく気持ちに整理がついてくるのでした。神のなさることは本当に不思議です。土手での祈りを終えて家に帰ってきたちょうどその時、速達が届けられました。それは、看護学院から私にきたものでした。「あなたを不合格としたのは、血沈が非常に下がったため、看護婦として不適格と思われるからです。しかし、再検査をしたいと思いますので、もう一度来て下さい」という内容でした。

そこで私は、急いで学院へ行き、もう一度検査したのです。「まだ平常よりだいぶ下がっていますが、これから看護学院テスト期間が六か月ありますから、戴帽式までのその期間、テストしましょう」と言われ、ようやく入学許可が下りたのでした。不思議なことに、この六か月間病気をしなかったのは私だけだったのです。

血沈が異常だった原因は、試験前の私の生活にありました。信仰を持って非常に喜んでいた私は、本気で主に従いたいと思い、集会があると必ず集会に出席し、集会のない時は、宣教師のところで聖書の話聞き、毎日のように終列車で帰ったのです。それから受験勉強をし、兄姉のことを祈るために土手を往復し、だいたい夜中に帰るわけです。けれども、次の日の朝起きられなくなるといへんなので、布団で寝ないでこたつで横になるという生活を、二か月も続けていたからでした。

そのために、肉体的にも精神的にも非常な緊張と疲労が重なり、血沈が下がってしまったのです。

幸いにも、不合格の時から何日間か休養したせいか、再検査の時は、正常値すれすれになっていました。

この経験を通し、神様は、ご自身の約束に信頼する者に対し、真実に答えて下さることを、みことばの真実さを深く経験させて下さることを教えられたのです。

土手での祈り

救われた当時、私の心は少しでも多くの人々に福音を伝えたい、祈りたいという気持ちでいっぱいでした。主のために何かしたいと考えた私は、教会の愛する兄姉のために祈ることが兄姉を愛することであり、神様が喜ばれることであると信じて実行することにしたのです。

救われてからは、集会に出たり、宣教師の入院している病院へ行ったりして、帰りたいてい終列車でしたが、帰ってくると、毎晩、祈るために家のそばにある土手に行きました。祈りながら歩き、橋のところまで来るとその橋を渡って反対側の土手の上を歩いて戻ってくるのです。戻ってくる頃になると、ちょうど全部の兄姉のために祈ることができました。私は、祈

らなければ心が落ち着かず、毎晩十二時過ぎまで土手の上を歩きながら祈りました。

ある日、さんさんとふり注ぐ太陽の光を受けながら土手を歩いていた時、「ああ、この光を見つめながら信仰生活の歩みを全うしたい」と思いました。祈りながら歩き続けていくうちに、ある所まで来るとその土手がブツツと切れてしまったのです。それ以上道が続いていません。太陽の光も周りの何かに遮られてしまいそうでした。私はその時に、もし光を求めて歩き続けるならば、そこには道ならぬ道があり、あぜ道があり、あるいはこぼこの道があり、坂があるのだということを見せられたのです。

たとえどのような道であろうと、私はこの光を見続けて歩きたい、そして、その光を追いながら道ならぬ道を歩き、光を見失わない所に行きたいと思いながら歩き続けました。やがて、小高い山の上に出ました。

私の信仰生活において、平らな道だけでなく、あぜ道や小川があり、そして石ころの道や坂道があるうとも、光なる主を見失ってはいけない。光なる主を見続けて歩み、どんなに困難であろうとも従っていきたい。今、この小高い山への道のりは、私の生涯を暗示しているのではないだろうか、ふと思わされました。

その山に登って、「主よ、いずこまでも行かん、いずこまでも、私の生涯をあなた様におささげします」と、心を込めて祈ったことを思い出してみる時に、その後信仰を持って結婚生活

に入り、聖書学院、函館の開拓伝道、そして札幌へと遣わされた道は平らな道ではなく、本当に困難と涙と叫びの道であったとしみじみ思います。

しかし、主を見上げつつ今日まで歩めたことは、あの時、いかなる道をも主に従ってまいります、と決心した思いが神様の恵みとあわれみによって、今日まで支えられてきたことを思い返し、深く主に感謝するのです。

結婚に導かれて

宣教師に紹介されて初めて三橋さんを訪ねた時、彼は鉄道員の青い作業服を着て、炉端に座っていました。

お会いした瞬間、この人は生涯結婚もできず、このような生活が続けるのだろうかというところが強く心に残ったものです。宣教師から「障害の程度はかろうじてトイレに行けるくらいでしょう」と聞かされていました。座っていた彼は、曲がった細い脚を浮かせてあぐらをかいており、ひげも髪の毛も割合伸びていて、私が突然訪ねていったのには、いささか驚きあわてた様子でした。

勧められるままに部屋に上がり、いろいろな話に花を咲かせました。宣教師との話し合いで
 蘭がゆく思うことも、彼とは心ゆくまで話せたこと、いろいろな角度から人生や聖書のことを
 話し合えた楽しさから、私は幾人かの友人を彼に紹介し、よく訪ねたものです。彼はいつ行っ
 ても家におり、快く話に乗ってくれました。ついに、私の友人の家族の悩みごとまで持ち出
 し、そのお母さんまでが訪ねてくるようになり、個人伝道の場合へと発展していったのです。

宣教師が帰国してからは、もっぱら彼のところが私たち女学生の集まりの場所となっていた
 のです。看護学院に入学してからは、寄宿舎生活になりましたので時間的にもゆとりができ、
 彼を教会に送り迎える兄弟姉妹たちの仲間に加わることもできました。その行き帰りの道で
 一対一で親しく語り合う時が与えられ、これが彼とのかかわり合いの始まりとなったのです。

特に土曜日の午後は、時間の許す限り彼を訪ねることが多くなりました。彼にとってもその
 時間が楽しみとなり、土曜日は朝からその時間が来るのを楽しみにしているようでした（訪ね
 なかった時は、どんなにわびしく悲しくがっかりしたかを、結婚してからよく聞かされたものです）。教
 会の送り迎えや、みことばの質問などを通して、彼が私に対して心を寄せていることを何とな
 く感じるようになったのもこの頃でした。

しかし、その当時の私は、私なりに良き看護婦になりたいというビジョンがあり、悩み、そ
 の話し相手として彼のところに来ていたのです。私は、かの有名なナイチンゲールの生き方、

精神に共鳴していました。ナイチンゲールを愛した人は、彼女と結婚せず、陰ながら彼女を理
 解し、援助したのです。私もまた、三橋兄弟にそのことを理解していただき、そのようにあっ
 てほしかったのです。

彼は、伝道集会や路傍伝道でよく福音を語っていました。ことに路傍伝道では、リヤカーに
 乗って澄んだ大きな声で力強く語る彼に勇気づけられ、私は道行く人々を強引に引っ張ってき
 ては彼の話を聞かせたものです。それにしても、彼の教会での聖書の学び、伝道メッセージは
 心を打つものがありました。特にローマ人への手紙の研究は、兄弟姉妹の楽しみでもあったの
 です。こうした語り合いの中での宣教に対する重荷と情熱は、私にも共通するものがありまし
 た。

彼は聖書学院に入学して訓練と学びを受けたいと切望していましたし、私は主のご命令なら
 ば看護婦として、たとえ海外であつてもお従いしたいと心に決めていたのです。彼の心情がわ
 かるにつれて、その助け手が与えられるようにと祈るようになりました。

その頃、私は彼のためにある姉妹のことを考えて祈っていたのですが、ある日のこと「あな
 たはどうですか、あなたは」と自分の祈りとはまったく反対の主の問いかけのみ声を聞きました
 た。驚きの中でそれを打ち消すように、「私にはできません。看護婦の道も開かれ、この道で
 ご奉仕させて下さいと願ってきました。これがあなた様のみ旨であると、今まで信じてまいり

ました」。私は悲痛な思いで祈り叫びました。

しかし、主のみことばは、「あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい」と厳肅に語りかけたのです。

「代価を払って買い取られた！」このことを通して、もう自分ではなく神が所有者であり、主権者なのだと悟らされたのです。主権者のみ前に、私はできませんとか、できませんとかいう何者でもないのではないだろうか。クリスチャンとしてゆだねて神のみ旨の中を歩むことこそ最高の道であり、神もまたそれをお喜びになるのだと理解したものの、私の心の奥底にある異性に対する思い、その理想ともすべき男性を意識している別の自分を発見したのでした。

愛のない結婚は考えられませんが、その愛とは、真実の愛とは何なのかの問いに、「人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていない」というみことばが迫ってきたのです。

私のような者が、輝くみ神の所有とされるには、どんなに高価な犠牲が払われたことでしょうか。偉大なるみ子キリストの死、これこそ、神が私に現された真実の愛にほかなりません。それだから、あなたも兄弟のためにいのちを捨てるべきですと、このみことばによって真実の愛の姿を教えられたのです。

これらのみことばによって、主がこの私を通して彼との結婚のご計画をなさそうとしておられるみ旨に対し、主が示して下さった与える愛をもって従う決心をしたのです。主を宿したマリヤは、天使ガブリエルを通して受胎告知を受けた時、驚きとまどいの中であって、神には不可能はないというみことばに接し、信仰と従順をもって「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように」と敬虔に祈り、救い主を宿するという素晴らしい光栄に浴しました。私もまた主のはしためにすぎないではないか、あのマリヤのように、主のみ旨がこの身になりますように、と祈ったのです。

新しいスタート

私共の結婚式は出席者二十名ほどの非常に簡素なものでした。

クリスチャンが十二、三名と、主人と私の友人数名。普段着で出席した方が多く、お茶と駄菓子程度のお祝い。それでも花嫁は紺のスーツに白いベールをかぶり、胸いっぱい花束を抱えて花婿のそばに座っていました。この花束は花婿からの愛のプレゼントだったのです。今の華やかな結婚式に比べ、何ともの足りなく、またもの悲しい雰囲気さえ漂っていたことでしょうか。

も当然でした。

心から賛意を表する人もなく、祝福のことばも少なく、理解も励ましのこともないひっそりとした式でした。

母にとって、私が看護学院に入ったことは大きな喜びであり、大いに期待していたことでもありました。卒業する日を夢にし、どんなにか楽しみにしていたことでしょうか。

それが看護学院を中退して、一級身体障害者と結婚するというのですから、そのショックはたいへんなものだったにちがいません。自分も子を持つ母親の立場になって、あの頃の母の心进行い出すことに涙が出てしかたがないのです。

「人は幸せになりたいから信仰を持つのではないのか。あんたにそのような結婚を強いて不幸にするような神ならば、のろって捨ててしまいなさい」と強い語調で責めたのは、当然のことです。「花ならばつぼみ、今にも咲かんとするものを無惨にも途中からむしり取ってしまう残酷な神なのですか」と自分の心がかきむしられるような痛みと苦しみの中で憤る母の心を解せぬほど、愚かな娘ではありませんでした。

母は学問はありませんでしたが、その尊さを知っており、子供たちを学校に入れることには堅い信念を持っていたのです。そのための母の苦勞、忍耐には子供心にも深い尊敬と愛慕の念を抱いていましたし、いつの日にかきつと母に報いたいと願っていたのです。



結婚式当日姉妹たちと共に

私の両親はもちろんのこと、親戚も、兄弟姉妹の出席もなく、ただ無理やりに主人の姉と私の一番上の兄にだけは出席してもらったものの、祝福どころか顔をそむけるように横を向いて写した記念写真が、あの当時の光景を思い出させます。

主が私共の仲人、主が共にいて下さらなければ、どんなに豪華で人々に祝福された結婚式であっても味けないものになってしまったことでしょう。

はたから見れば、看護学院を中退しての結婚、しかも夫となる人は一級身体障害者で生活能力がないばかりか、その手足となって生涯の回りの世話をするだけの結婚生活に對して、生活の苦しさを経験してきた人たちが、その厳しさを案じて猛烈な反対をしたの

幼い時から母に良い子と思われていた私だけに、母の心を決して裏切りたくなかったのですが、みことばははつきりと「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。……自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとしします」と語っていました。

父もちろん猛烈に反対しました。それでも、ついに「どうせ嫁にやる娘なのだから、この結婚を許すとしても、看護学院を卒業して看護婦の資格を取ってからにしてはどうなのか。お前が看護婦として働けば生活していけるだろう」と父としては話のわかる勧め方をしてくれました。けれども、そもそもこの結婚はこれからの生涯を神のために働き、献身することが目的なのですから、二人の生活を支えるために看護婦の資格に頼る気持ちはまったくありませんでした。

「かすみ、を食べて生活できるわけではない。」

親たちは生きることがどんなにたいへんなことか知っているだけに、私たちの考えていることと、神に頼って生活をするということなど、現実的なこととして理解できないのは無理もなかったのです。

父は私が聞き従わないことを知ると、たいへんな権幕で怒り、「もう子でもなければ、親で

もない。この家を出ていけ」と勘当を言い渡しました。

しかしその時、激しく憤る両親の前で、勇気を持って「私の信じている神は全能なる偉大な神です。これから先私にどんなことをして下さるか見ていて下さい」と言えたのは、神に信頼して立ち上がる者に与えられる平安によったのでしょう。

私は汽車に乗って看護学院の寄宿舎に帰るつもりで、小走りに駅まで来たのですが、父はどうやって私よりも先に来たのか、汽車に乗ろうとする私の前に立ちふさがり、「幸子！ お前は本当に行く気なのか。生きるっていうことはたいへんなことなのだよ」と諭しました。

勘当はしたものの、後を追いかけてまで思いやってくれる父の情愛に私の心は動かされました。その絆まで断ち切らなければならないつらさの中で「はい、行きます」と、目をうるませる父を残して汽車に乗ったのでした。

信仰の仲間ならきつと理解し、賛成してくれるだろうと期待していましたが、そうではありませんでした。おもだった兄弟方に三橋兄弟との結婚の導きについて話したところ、このほか驚かれ、「結婚とはそんなものではない、兄弟は信仰生活も長いし大人ですが、あなたは信仰生活も一年ですし、今は看護学生で未成年でしょう。その結婚はやめなさい。三橋兄弟に断りなさい」と言われた時、信頼していた兄弟方だっただけにショックでした。

それでは神に従うということで、親から勘当までされたことは間違いだったのだろうかと思